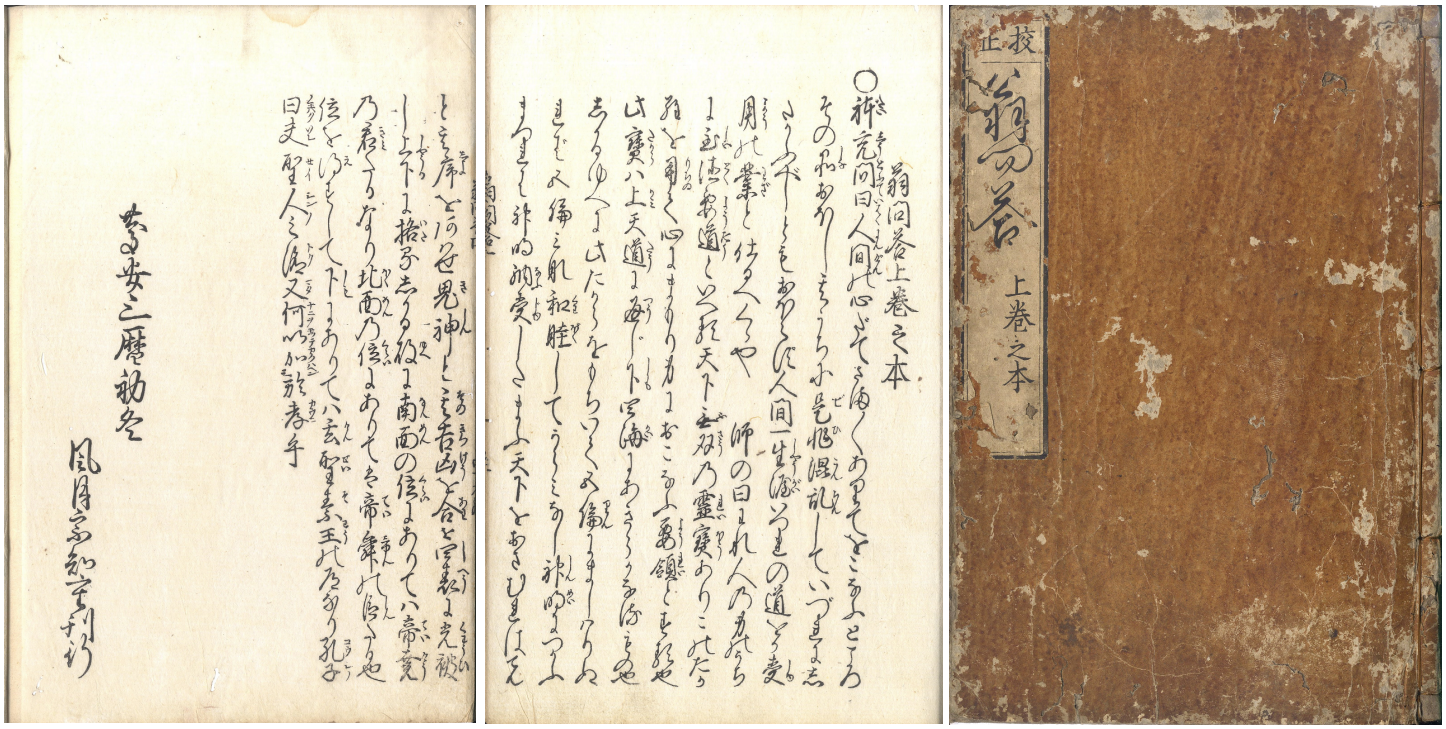
【読楽】020 「翁問答」を読む　＊読楽箇所＝跋文および第1冊（上巻之本）本文の一部



［概要］　＊「日本古典文学大辞典」参照

翁問答（おきなもんどう）　5巻または2巻。儒学。中江藤樹著。寛永17年（1640）か、18年の作で、同20年に京都で刊行。藤樹はこれを捨て、後しばしば改筆。慶安2年（1649）本は誤字脱簡多く、慶安3年、改正編を付して刊行。さらに翌4年より天保2年（1831）まで刊本多数。

【内容】天君という老翁と体充という門下が人間の道について問答したのを傍らで聞き、仮名まじり文で記した、という体裁をとるが、もちろん虚構で、藤樹の自作。人間の身の内には孝徳・明徳・良知という天下無双の霊宝があり、その命に従って行動し、神明に仕えるならば、天下国家はよく治まるという。孝は宇宙の本源たる太虚と一体であり、『孝経』にもとづいて、天子・諸侯・卿大夫・士・庶人それぞれの孝を述べる。俗儒のように経書の文字訓詁を記憶する学問ではなく、経書の心を師とすべしとし、武士には軍法を必須の学とし、また太虚の皇上帝を人間の太祖として尊び、聖人も釈迦も達磨も儒者も仏者もすべて皇上帝の子孫であるという。心学・心法という語を多用し、良知を強調するのは陽明学の影響であるが、中国明末における三教（儒・仏・道）一致の思想の影響を深く受けつつ、宗教的な立場を根底として人倫の道を説き示している。平明に理を説いて、教訓読み物としても広く行われた。

……

＊『ブリタニカ国際大百科事典』

中江藤樹の著。寛永18（1641）年の作。その後数回修正された。藤樹がまだ陽明学に完全に転じていない34歳頃のもので、朱子学的思想を濃厚に示している。上（本、末）、下（本、末）2巻と、その補遺と考えられる改正編から成る。老翁天君という師と躰充という門人との問答体で書かれている。孝を父母先祖に対するものとしてのみならず、一切の道を統括するものとして根幹的にとらえ、心法、五倫、真の学問とにせの学問、文武、軍法、法と学問、士道、神道、仏教など多方面にわたって論じ、なかんずく、仏教排斥の論は藤樹著述中最も詳しい。改正編は、のちに陽明学的立場からの改正を意図したものである。

……

＊『平凡社世界大百科事典』

中江藤樹の著書。1641年（寛永18）に成立。藤樹死後の49年に丁子屋仁兵衛より刊行された5巻5冊本が正規の最古版。翌年に訂正、再構成を行い、改正編を付載した5巻5冊本を風月宗知より出版。以後の出版はこの2系統のどれかに準拠。かな文の問答体の儒教入門書として、江戸時代の末まで広く流布した。藤樹が朱子学から陽明学に転じた時期の思想形態がうかがえる。《藤樹先生全集》第3冊、《日本思想大系》29などに所収。

……

＊『小学館日本大百科全書（ニッポニカ）』

江戸初期の儒学者中江藤樹の著。1640年（寛永17）から翌41年にかけて、藤樹33～34歳のおりに書かれた。天君（てんくん）という師と躰充（たいじゅう）という門人との問答の体で記されており、上（本・末）、下（本・末）の2巻からなる。成立時期は、藤樹の「中期」に属し、藤樹が大乙神（たいいつ）信仰を始めた時期とちょうど重なる。儒道、五倫の道、真の学問と偽の学問、文と武、士道、軍法、仏教、神道などが論ぜられているが、なかでも心学の提唱と普遍道徳としての孝説が注目される。すなわち藤樹は、人が単に外的規範に形式的に従うことをよしとはせず、人の内面（心）の道徳的可能性を信頼し、人が聖人の心を模範として自らの心を正しくすることこそが、人に真の正しい行為と正しい生き方をもたらすと説き（心学の提唱）、また父祖への孝のみでなく、いっさいの道徳を包括するところの孝の道を説いた。

……

＊小泉編『近世育児書集成』の解題（『翁問答』より育児論を抄録。拙稿一部省略）

天君と称する老師と門弟の体充（躰充）の問答に仮託して綴った教訓。収録した第1巻は「人間一生涯のうち、いづれの道をか受用のわざとなすべく候や」という体充の問いに対して、「至徳要道」という生得の宝を心に守って五倫の道を行うべきこと、そして、この宝を求めて学ぶことが「儒者の学問」であり、この教えは貴賤男女の違いなく「本心」ある人ならば誰もが実践できる道であると述べ、以下、「孝行の条目」たる五倫の道について順々に諭す。第1巻・第14丁以下、父母の恩徳や子どもに対する慈愛を述べたくだりに子育てに関する記述が見え、胎内十月より出産を経て「乳哺三年」に至る父母の苦労、さらに入学後の慈愛など、父母の広大無類の恩を説き、それに報いる孝行は数々あるが詰まるところ、「父母の心の安楽なるようにする」ことと「父母の身をよく敬い養う」ことの2つであるとする。さらに子どもに対する親の愛情に触れた後、子孫の教育は幼少時が根本であること、真の教育が徳教にあること、8歳以降は『孝経』を読ませて大意を説き、15歳以上には師匠と友を選ぶべきことなどを諭す。

なお、本書は藤樹が門人に書き与えたもので、まもなく書肆の手に渡り寛永20年に無断で出版されたが、藤樹は不満のある著作として書肆に申し入れて絶版にさせた。書肆が板木の損失を甚だ嘆いたために、代わりに女訓書の『鑑草』を与えて出版させたという。

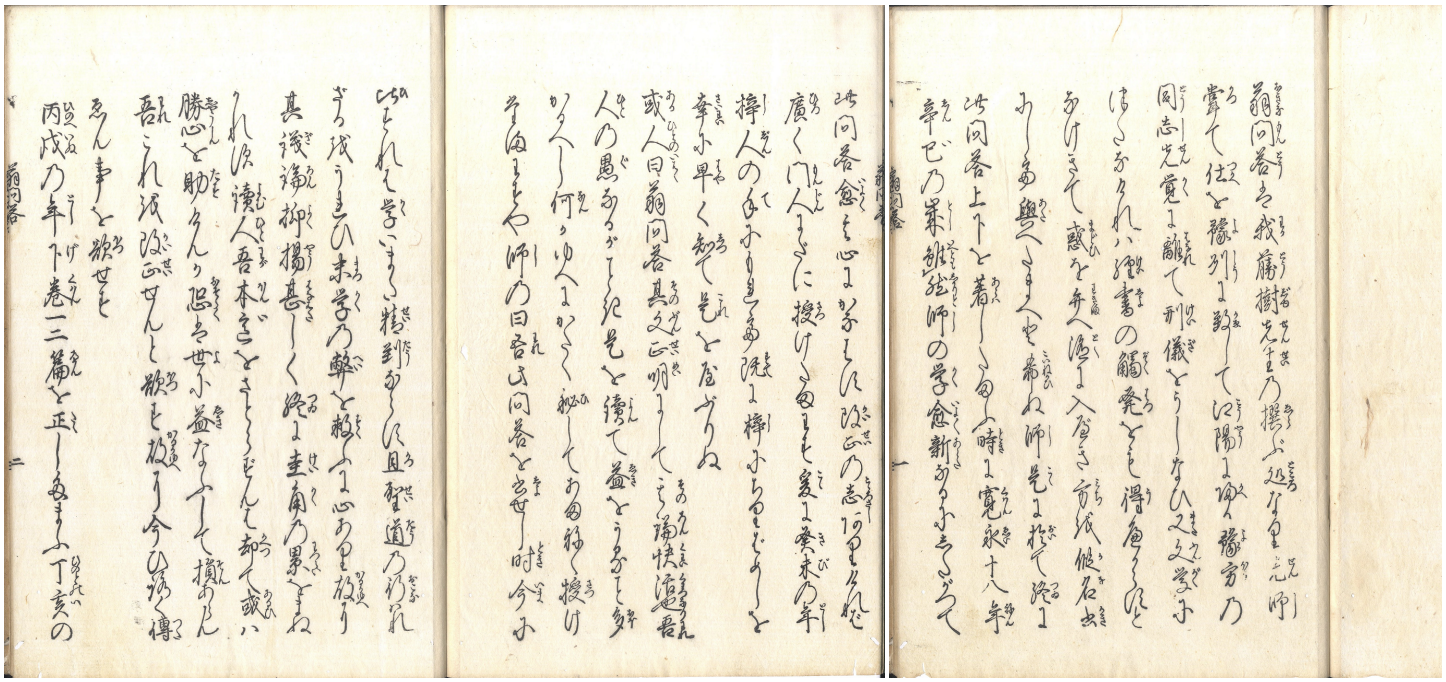
［板種］

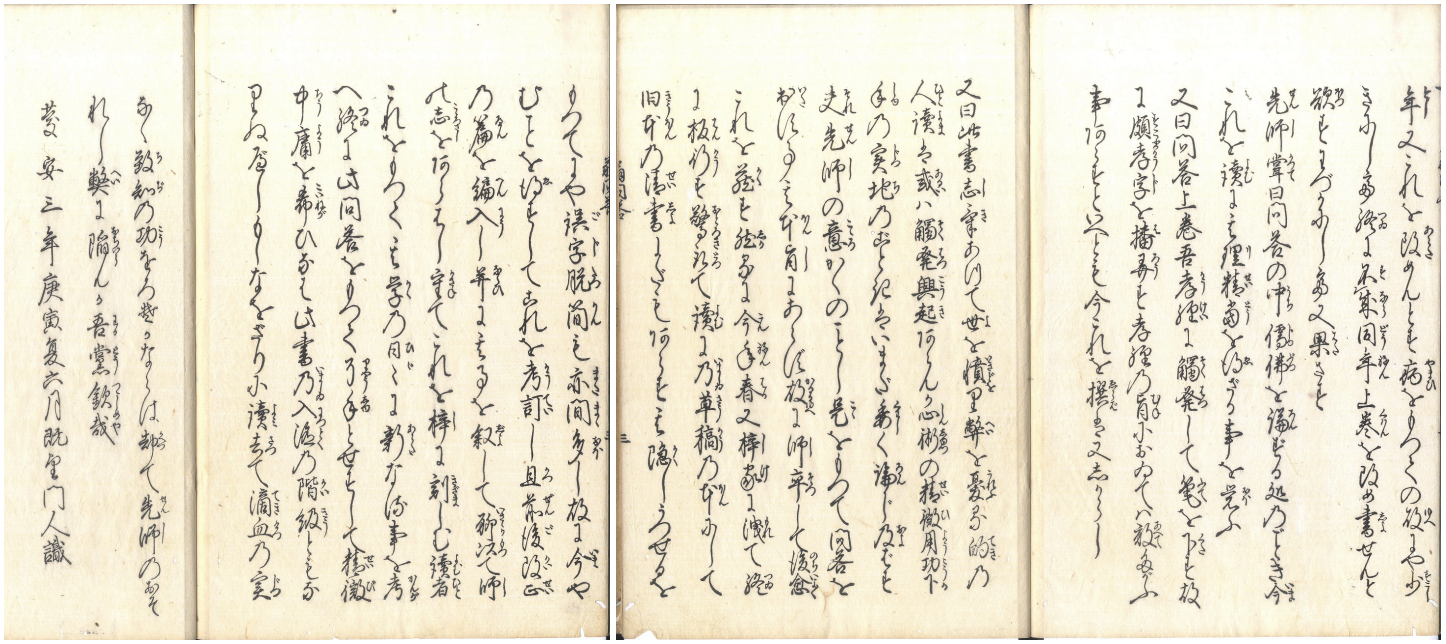
大きく慶安2年板（書肆の無断板行）系統と慶安3年板（門人校訂）系統に分かれる（板元順不同、下線は家蔵本）。

○慶安2年（丁子屋甚兵衛板／勘兵衛板） → 万治2年（西村又左衛門板／吉野屋権兵衛板） → 寛文2年（西村又左衛門板）
→ 天保2年（山本九左衛門板／小林新兵衛板／英文蔵板）

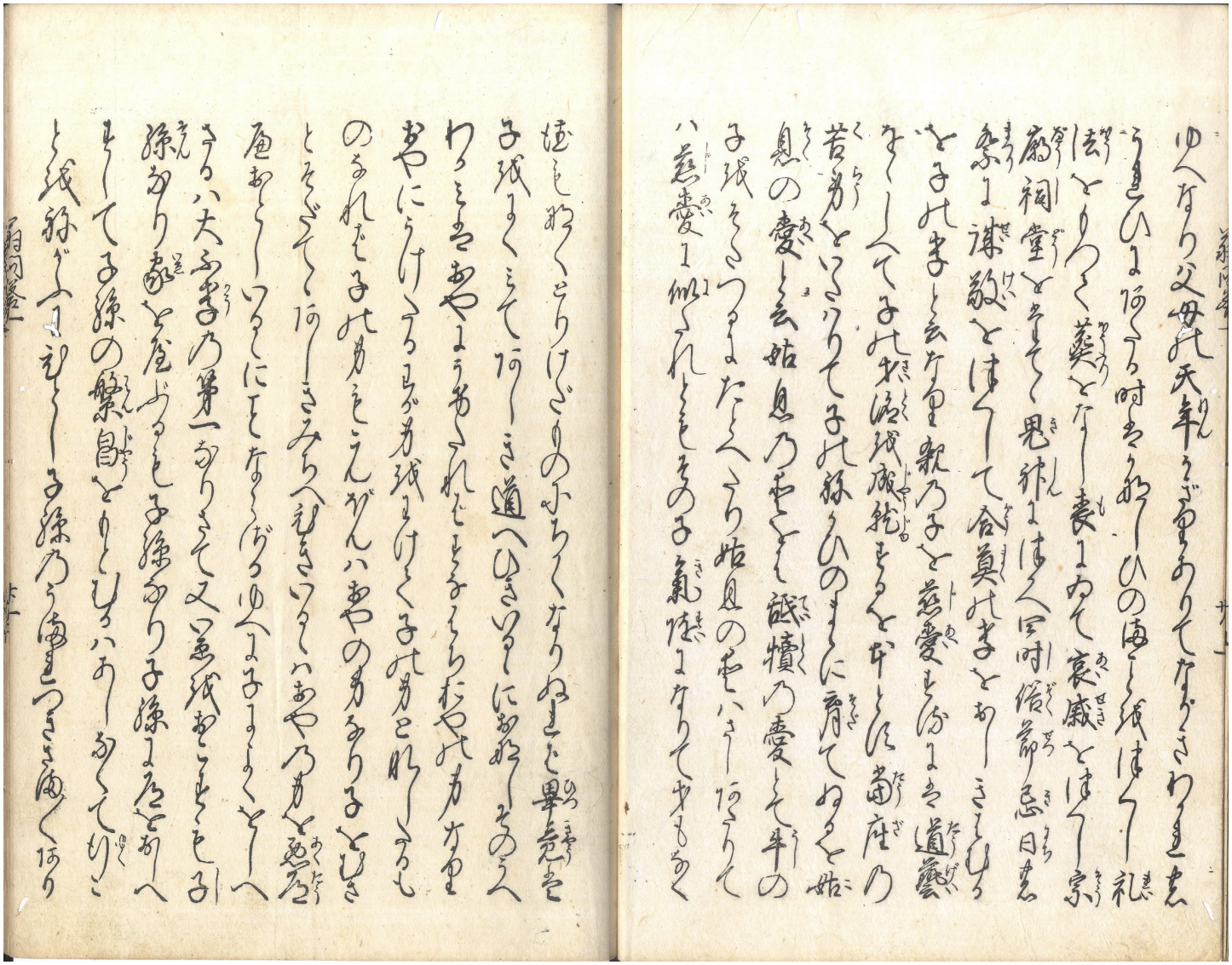
○慶安3年（風月宗知板） → 慶安4年（野田庄右衛門板） → 宝永6年（吉野屋権兵衛板）

［跋文］ ＊慶安3年門人校訂本刊行の経緯が分かる。





[本文] ＊第1冊（上巻之本）本文の一部（20丁裏～23丁表）



て一概にその人の法をさだめがたしといへどもまづ
おほかたをいへば忠臣孝道と何さうらふもあるとし
への根本とし其外藝人にもそれぞれ無益をすて
にんげんのうまれありしことをこゝろ得じけくかん
きんの孝徳なきものはてんち鬼神のにくみをうくる
まふところなれば一旦えいぐわにほこるといへども子
らば一代二代のうちに子孫断滅するものなりたとひ
ずうめつせざれどもあるひはなさけなき人としてしまく先祖の
すいぜいの人になりて相続せられても子孫さにひし
まさる人も眼前一たんの富貴かまはれども無上
のものなりとおもひてさだめなくおもはりするは法然

真実ともおもはざるはきはざるゆへにたゞ孝のさか何せず
ましけまでもその外はみにもつしねとのすりとおもひ
前末是非と云みづしく無上のたのしみとおもふ事と
きゝは無下に浅ましきて子孫にとしゆるには幼
少のときは根本とはむかしは胎教とて胎内になる
あひだまもし母親の教化あり海時代人を道理と
らざるゆへにあきらかにはへとしへはなきものなりと
思へり教化のまことをきゝしにしてなくにいひとし
てねるむりとおもへともよりおこりさうおもしはせ
根本真実は教化は胎教なりくらしまくたとしへ
むしてまさりみちをきこおひかく人生れたのづ

くし教化と後接胎教といふたへどむね拘をとうる
はし火のものをとしは時もし國土の方角水土
の風気によつく人間のむまれつきをつしばか
つりあまりといへども調つきにはぢんちい京田舎の
差別あきらゆへに都鄙のさかくあらすくそぞてね
まりて質素すくなく生れつくものも京ましたしむらあり
くもんとうすくそぞてくねもおも京にして生れそだ
りのもと質朴とおのになるとしくあきなおもつて
ろしてかりうも父母のあとなしなくまてかりう
と見あやりをはやうかによろしく父母めぬとの教化と
子孫にとしゆる根本もは志のはへに乳母の人がう

えらしは父母の力をあさめ心とたくしくして全孝せん
みちをくらふきうり力におこなはすして人の根本を
悟者ともへしハツ九ツの歳ころの時ハむまれつき
利根なるものには孝経をよませ身やしく孝経の大
意をときてきかせて為とさとらせ又六藝の
うち急用なる藝よりそろそろとおしへ又道遠
備のとしへをあらためへし生れつき愚鈍にてさい
とく道備のなきものかどうきにおもまぶ孝経の義理を
一つとてくかたりきかせて孝法の本心とうしなはじ
て成人とおうとしへそのやうちくさもへし成童の時
には又師匠を友撰えらびとおもして人の眼とは

[参考] ＊『翁問答』に関する拙稿の一部（月刊『武道』の連載記事から抄録）

●徳教は人間教育の理想

厳格教育に限らず、日本の育児思想では親や師匠など教育者の姿勢が重視され、「徳教」が理想とされた。徳教とは、教育者の人徳によって子供が教え導かれ、感化されることを言う。中江藤樹が寛永17年（1640）に著した『翁問答』1巻には、こう説かれている。

> 根本真実の教化は徳教なり。口にてはをしへずして、我身をたて、道を行ひて、人のをのづから変化するを徳教と云。たとへば、水の物をうるをし、火の物をかはかすがごとし。

徳教は、水に触れて湿り、火の近くで物が乾くように、自然と子供の心に染み渡り、子供の人格を形成していく教育であり、その要は教育者自らの垂範にあり、言葉で教えるものではなかった。蛇足だが、戦後の道徳教育の弱体化は徳教の欠落が大きいと考える。今後、道徳の教科書導入が実施される見込みだが、知識のみの徳育に終わらせず、教育現場における「徳教」の実現を期待したい。

中江藤樹肖像（『先哲像伝』2巻）

さて、子育ての全責任を負った江戸時代の父親は、一家における善悪の基準であり、父親の言動が一家の指針となったから、まず父親から襟を正すことが求められた。常盤潭北は元文2年（1737）刊『民家童蒙解』下巻でこう述べている。文中「其身」とは父親を指す。

> 一、子を育るには、先其身を正しうし、妻や乳母を戒て、あしき言をいはせず、あしき戯れをさせず、仮にも嘘をいはせず、万事正しかるべし。其身正しく、妻や乳母正しければ、子に教ることはおのづから正し。出入者も其父母善を好み悪を悪むとしれば、其子にあしきことは聞せ教ぬ者也。如斯にして生質の美醜は論に及ばず。若、その身正しからずんば、子の教育は何共いふべからず。これ、子を育る道によりて其身を修め、人を修る道を得るなり。…父緩やかなれば子も内甲を見透し、「此位の事にて、よもや追出しはすまじ。高が訶られて済ことよ」とわる積から仕過し、彼愛の過たる愚痴から怒も十倍して勘当することにはなりぬ。

放蕩息子の勘当も、元を正せば、父親が厳しく育てず、子育ての初めを慎まなかったからである。林子平が言うまでもなく「玉と育てて後に勘当」は無慈悲の極みで、そうならぬために厳格教育が説かれたのである。

●江戸前期の胎教論――中国胎教論からの脱皮

永観2年（984）成立の『医心方』以来、日本の胎教論は、中国の『劉向列女伝』等の諸説をほぼ踏襲するものだったが、その中で、『医心方』が「夫は妊婦に力を使わせないように気をつけよ」と夫の配慮を促す一方で、「生まれる子が愚かだったり、傷があったり、醜かったりする原因は母親にある」と妊婦の決定的な影響力を強調した点は看過できない。

この傾向は、あらゆる身分・職分で多彩な育児書が登場した江戸時代にも見られるが、江戸時代の胎教論は論者や時期によって論点や強調点に違いがある（表参照）。

まず、胎教をいち早く紹介し論じたのが、日本最初の陽明学者として知られる江戸前期の儒者・中江藤樹である。寛永15年（1638）、学問研究や著作に多忙を極めていた31歳の藤樹は、門人・大野了佐のために大部の医学入門書『捷径医筌』（漢文）を著した。「われ、了佐に於いて幾ど精根を尽くす」と述懐しているように、愚鈍ながら熱心に学ぶ了佐に応えようと、藤樹も身を削る思いで綴ったという。

この『捷径医筌』の中で、李挺（明代の医師）の『医学入門』を引きながら、妊婦の心身の健康状態や身体活動・食生活を適切に保って胎児に良い影響を及ぼす重要性を説いており、藤樹の胎教論の萌芽が見られる。

その数年後の寛永18年に草稿（藤樹没後の慶安3年（1650）に改訂公刊）が成った『翁問答』では、仮名書きの平易な文章で、当時一般的でなかった胎教について触れ、さらに、同時期の女性向け教訓書『鑑草』（正保4年（1647）刊）でも、『劉向列女伝』の所説や太任・文王の故事などを引いて、胎教の本質が母徳の教化（言葉ではなく行いによって善導すること）にあり、その際に大切な心掛けが「慈悲」と「正直」であることを諭した。今日の胎教は、妊婦と胎児とのコミュニケーションや胎児への教育的営為な意味合いが強いが、徳教を重視する藤樹の胎教では、もっぱら母親の心持ちと行いに焦点が当てられた。

●かつて小学生の常識だった「近江聖人」

滋賀大学附属図書館の調査では、旧教科書（明治初年から昭和20年の終戦まで）約8500冊に登場する近江の歴史上の人物は、①中江藤樹88回、②井伊直弼35回、③石田三成29回、④山内一豊の妻28回、⑤最澄24回の順に多く、とりわけ中江藤樹は突出して多かった（近江聖人中江藤樹記念館『中江藤樹入門』）。

戦時下の昭和18～20年に国民学校初等科5年（現在の小学校5年）で使用された『初等科修身3』には、「近江聖人」と題して6頁余にわたって、藤樹が次のように紹介されている（表記は新漢字と算用数字を除き原文通り）。

中江藤樹の墓（滋賀県高島市・玉林寺）

中江藤樹は、近江の小川村に生まれました。小さな時から心だてが正しく、近所の子どもと遊んでも、わるいおこなひを見習ふやうなことは、ありませんでした。

藤樹が9歳の時、米子藩主につかへてゐた祖父のところに引きとられました。祖父のいひつけで、藤樹は、字を習ひました。よく勉強したので、早く上手になり、まもなく祖父に代つて、手紙を書くことさへできるやうになりました。（中略）

14、5歳のころ、祖父母は、相ついで死にましたから、藤樹は、祖父の家をついで大洲藩主につかへました。18歳の時に、故郷の父が死んで、母一人になつたので、その後役をやめて、小川村へ帰ることにしました。

小川村へ帰つてのち、くらしはまづしくても、年よつた母につかへて、よく孝行をつくし、また熱心に学問にはげんだので、たいそう徳の高い学者となりました。

藤樹をしたつて、遠いところから教へを受けに来る者が、だんだん多くなり、小川村を始め、近くの村々の人は、みんなその徳に感化されました。

世間の人は、近江聖人と呼んで、藤樹を心からうやまひました。

41歳の時、藤樹はなくなりました。なくなつてからも、藤樹の感化は、みんなにしみこんで、村の若い者は夜集まつて手習をし、たがひにおこなひをつつしんだので、小川村は、たいそうよい風俗になりました。それから長い歳月がたつてゐますが、今でも村の人たちは、毎年祭をして、藤樹の徳をしたつてをります。

ある年、一人の武士が、小川村の近くを通るついでに、藤樹の墓をたづねようと思つて、畠を耕してゐる農夫に道を聞きました。すると、農夫は、

「旅のお方には、わかりにくいでせうから、御案内いたします。」

といつて、先へ立つて行きました。途中で、自分の家にたち寄り、着物を着かへ、羽織まで着て来ました。その武士は、心の中で、自分をうやまつて、こんなにていねいにするのであらう、と思つてゐました。

藤樹の墓についた時、農夫は、垣の戸をあけて武士を正面に案内し、自分は戸の外にひざまづいて、うやうやしく拝みました。このやうすを見て、武士はおどろき、さきに農夫が着物を着かへて来たのは、まつたく藤樹をうやまふためであつたと気がついて、農夫に、

「藤樹先生の家来ででもあつたのか。」

と聞きますと、農夫は、

「いえ、さうではありませんが、この村には、一人として先生の御恩を受けない者はございません。私の父母も、『自分たちが人間の道をわきまへ知つたのは、まつたく先生のおかげであるから、決して先生の御恩を忘れてはならない。』と、つねづね私に申し聞かせてをりました。」

と答へました。

その武士は、初め、ただ藤樹の墓を見て行かうといふくらゐにしか考へてゐなかつたのでしたが、農夫の話を聞いて、深く心にはぢ、ていねいに墓を拝んで行きました。

以上がほぼ全文で、当時は、10歳足らずでこれを学んだように、藤樹は、戦前の日本人にはよく知られた偉人であった。

●幾星霜を超えた藤樹の余徳

この「農夫の道案内」の逸話は、医術修行で全国を行脚した橘南谿の『東遊記』(天明5年(1785)刊)にも登場するが、同書には、藤樹に私淑する分部昌命(大溝藩五代藩主光忠の孫)が藤樹真筆の掛軸を客に披露する際に、礼服に着替えて床に懸けると、はるかに引き下がって拝礼をしたという逸話のほか、彼が現地で自ら聞いた次の話も紹介している。

> 中江氏の子孫絶え、今は無し。…されども、其余教近郷に深く染み入りて、殊更、此小川村の百姓は、年若き者といえども毎夜集会して手習し、かりそめにも酒など打のみ、乱舞・音曲などをすることなく、まして、博奕などはいうまでもなし。故に、いかなる軽き者といえども、物書ぬものはなしという。誠に、此辺の風儀、温和淳朴にして、見る所、聞く所、感に堪ず。あり難き事どもなり。

藤樹は、慶安元年(1648)8月25日の早朝、隣家の門人2人に、幼い3人の子供のこと、若い妻の再婚のこと、私塾「藤樹書院」のことを言い残して、41歳の生涯を閉じた。藤樹書院は、その後、明治13年(1880)9月26日の夜、小川村の農家34戸を焼き尽くした大火災の飛び火で類焼したが、藤樹の遺品など多くが村人達によって運び出され焼失を免れた。現在は、明治15年に再建された藤樹書院が伝わるほか、付近に藤樹の墓(玉林寺)、藤樹神社、近江聖人中江藤樹記念館などもある。

筆者は、今年の5月半ば、藤樹の遺徳を偲んで、藤樹の故郷である高島市安曇川町上小川を探訪した。小綺麗で落ち着いた風情の町並みは、派手に観光地化されておらず、藤樹ゆかりの各施設や地域の人々の温かい応対にも藤樹の余徳が感じられた。

今から200年前の文政4年(1821)、幕府直轄の最高学府「昌平黌」の教授・佐藤一斎もこの地を訪れた感慨を漢詩に綴り、その最後を「今尚士民、礼讓に敦く、彊に入れば、問わずして、君の郷たるを識る(藤樹の死後170年を経ても、この地の武士も庶民も礼儀正しく、謙譲の心が篤いので、この地に足を踏み入れれば、問わなくても藤樹の故郷であると分かる)」(原漢文)と結んだ。先の逸話を含め、藤樹を敬慕する思いが、地域の人々に脈々と受け継がれているようだ。

●徳教の人、中江藤樹

前回紹介したように、藤樹は江戸時代、「胎教」の重要性をいち早く説いた儒学者だったが、子育ての根本は「口にては教えずして、我が身を立て、道を行いて、人自ずから変化する」徳教にあることを、その著『翁問答』(寛永18年(1641)初稿、没後門人の校訂を経て慶安3年(1650)公刊)で述べている。口で教えることが教育だと思うのは「教化の真実」を知らぬからで、「水が物を潤し、火が物を乾かす」ように自然と子供の心情を変化させる感化の教育が胎児から始まること、周囲の大人の人格や言動の影響が大きいことを強調した。

> 幼き者の心だて・身持ちも、父母・乳母などの心だて・身持ちを見あやかり、聞きあやかるによって、父母・めのとの徳教を子孫に教ゆる根本とす。しかるゆえに、乳母の人柄を選び、父母の身を修め、心を正しくして、全孝の道を口に語り、身に行いて、教えの根本を培養すべし。

「三つ子の魂百まで」と言うように、生涯に決定的な影響を与える幼児期の教育。それは、言葉を介さずとも、周囲の大人の心持ち・身持ちを通じて、無意識のうちに、一瞬一瞬に行われていることを藤樹は重視した。この点に着目すれば、意識的に言葉で教える影響力がいかに限定的かつ刹那的であるかに気づく。親の小言よりも、親が知らず知らずにとった言動の方がはるかに大きな影響力を持つとすれば、「親の背を見て子は育つ」という言葉の重みも増してくる。

冒頭で紹介した『初等科修身3』は、皇国民の自覚を植え付ける国家主義的な教科書で偏向に満ちているが、その教師用書(指導書)の次の記述は現代の道徳教育にも有効であろう。

> 修身指導の力が生まれるのは、全く教師の人にあつて、他のなにものでもない。設備のみが人をつくらず、教科書のみが人をつくるのでもない。人間は全く人間によつてできあがるといふことを絶えず念頭において、教師自身の徳化を十分に発揮しなければならない。

藤樹は、自ら徳教の人であった。戦後の義務教育では藤樹に触れる機会が乏しくなったのは残念なことだが、死後370年経っても彼の遺徳を偲ぶ者は多い。童門冬二著『小説中江藤樹』のあとがきで、國松善次前滋賀県知事も次のように熱く語っている。

> 時代がどんなに変わろうとも、いや、変われば変わるほど、大切にしなければならないもの、変えてはならないものがあります。それは、今日まで多くの逸話や美談として語り継がれた彼の「人間性に対する信頼」や「思いやり」、「敬い」を持った心であり、それに裏打ちされた行いではないでしょうか。そんな意味で、我々日本人の「心」のありようを示したとも言える藤樹の生き方は、いつの時代にあっても我々人間の原点だと思うのです。

かつて小学生の常識だった「近江聖人」中江藤樹。知れば知るほど崇敬の念が起こるに違いない。藤樹は、現代人、特に青少年期に出会いたい偉人の一人である。

●出版トラブルが契機で世に出た『鑑草』

正保4年（1647）刊『鑑草』は、中江藤樹生存中に出版された唯一の著作だが、実は、『翁問答』の代わりに刊行されたものだった。

藤樹は、寛永17年（1640）、33歳の秋から1年余で『翁問答』の草稿をまとめたが、不満足な点が多く、さらに推敲を重ねるつもりでいた。だが、その写しを入手した京都書肆（本屋）風月宗知は、密かに出版の準備を進めていた。寛永20年春、その事実を知った藤樹は即座に板木を破棄させたが、風月宗知が泣きついたため、藤樹がその代わりに渡したのが『鑑草』の草稿だった。

「（風月宗知が）損害を被り困っていると言ってきたので、女性の戒めとして『迪吉録』からの抜粋に批評を加えたものを『鑑草』と題して以前から温めてあった草稿の出版を許した。まだ、京都でも広く販売していないが、貴殿に一部進呈するのでご覧頂きたい。本書の故事は『迪吉録』『三綱行実』等の抜粋で、批評は私が書いたものだ」と、藤樹は門人・池田与兵に送った手紙に認めている。

このように『鑑草』は最初から女訓書として綴られたもので、その構成は『迪吉録』の「女鑑門」にならい、孝逆之報・守節背夫報・不嫉妬毒報・教子報・慈残報・仁逆報・淑睦報・廉貪報の8章から成り、引用された故事も大半が『迪吉録』に基づく。「迪吉」の書名は『尚書』の「迪に恵えば吉、逆に従えば凶」に由来するが、『鑑草』も全編が因果応報・勧善懲悪の思想で貫かれており、親、夫、実子と継子、奉公人、小姑、その他の人々に対する態度やその報いについて、各章毎に冒頭の訓話、途中の故事、最後の寸評または総評の流れで書かれている。

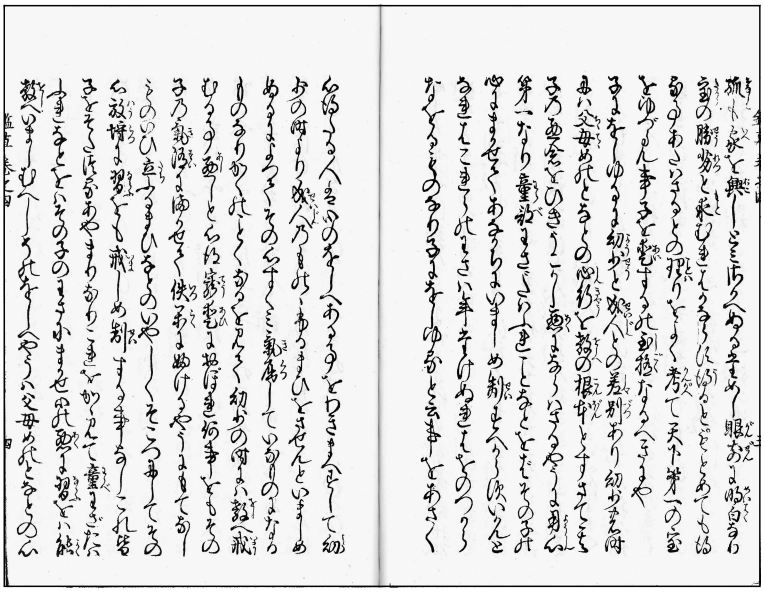
以下、『鑑草』「序文」と巻之四「教子報」を中心に、藤樹の教育思想を見ていく。

（中略）

以上、2回にわたって藤樹の教育論の一端を見てきた。彼によれば、心を育む人間教育の根本は徳教であり、感化の教育である。そして、明徳を明らかにすることが育児の眼目であれば、育児は、親にとっても子にとっても生涯続くテーマであり、この意味において、子育ても学問も一つであった。それを物語る『翁問答』（下巻之本）の次の言葉で締め括る。

それ学問は心の穢れを清め、身の行いを良くするを本実とす。文字なき大昔にはもとより読むべき書物なければ、只聖人の言行を手本として学問せしなり。

藤樹書院の扁額と外観（滋賀県高島市）



『鑑草』（正保4年（1647）風月宗知板）